

Title	屈曲シースを利用した超細経胆道鏡による除石術
Author(s)	佐伯, 光明; 星川, 嘉一; 野坂, 俊介; 谷, 一朗; 北川, あず真; 平良, 牧子; 山内, 栄五郎; 石川, 徹
Citation	日本医学放射線学会雑誌. 53(6) P.719-P.721
Issue Date	1993-06-25
Text Version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/11094/16762
DOI	
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/>

研究速報

屈曲シースを利用した超細経胆道鏡による除石術

聖マリアンナ医科大学放射線医学教室

佐伯 光明 星川 嘉一 野坂 俊介 谷 一郎
北川あず真 平良 牧子 山内栄五郎 石川 徹

(平成5年1月5日受付)

(平成5年4月20日最終原稿受付)

Biliary Lithotripsy Using Super Fine Cholangioscopy with the Deviced Bended Sheath

Mitsuaki Saeki, Yoshikazu Hoshikawa, Shunsuke Nosaka, Ichirou Tani, Azuma Kitagawa, Makiko Taira, Eigorou Yamanouchi and Tohru Ishikawa

Department of Radiology, St. Marianna University School of Medicine.

Research Code No. : 514.9

Key words : Biliary tract, Calculus, Super Fine Cholangioscope, Bended Sheath.

Percutaneous transhepatic cholangioscopy (PTCS) is an useful technique to evaluate or treat biliary diseases, although PTCS is an invasive method for the patients. We used 5 F or 7 F of super fine cholangioscopy to treat two cases of choledocholithiasis after surgery without dilatation of drainage tract. We developed different types of bended sheath for supplement of lack of angle system in this cholangioscope. Furthermore, by using bended sheath, cholangioscopic view improved, because saline was injected at the same time via the sheath. We emphasize that super fine cholangioscope with bended sheath is a safe and useful modality for evaluation of biliary disease.

緒 言

胆道結石に対する経皮経肝胆道鏡，以下 (PTCS) の有用性は広く認められており，特に治療としてのPTCSが期待されている。我々の施設では，平成3年5月より，胆道疾患に対して5Fもしくは7Fの超細経の胆道鏡を用いて，その有用性を検討している。今回我々は，胆道結石例に対し質的診断目的に行われた超細経胆道鏡にて除石を行い，さらに視野の確保のため専用のシースを考案したので報告する。

対象および方法

対象は総胆管結石術後の遺残結石と総胆管囊腫

術後の肝管結石の2症例である。使用した胆道鏡はクリニカルサプライ社製，5Fおよび7Fの超細経胆道鏡 (Fig. 1) である。遺残結石に対しては左葉からの瘻孔よりアプローチし，また総肝結石例ではPTBDの瘻孔よりアプローチした。胆道の屈曲および狭窄が強かったため胆道の屈曲に合うような屈曲シースを考案し (Fig. 2)，このシースを用いて手技を行った。

症例 1.

82歳男性：胆石および総胆管結石の診断にて平成4年6月に手術が行われた。術後の胆道造影にて右肝管に遺残結石が疑われ (Fig. 3)，確認の

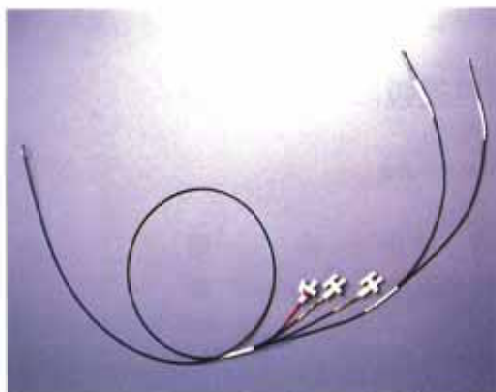


Fig. 1 Fine cholangioscope (7 Fr)

ため PTCS が施行された。胆道鏡にて遺残結石は一つであることを確認し、胆道鏡を結石より末梢に進め、付属のバルーンを膨らまし、徐々に引き抜き結石を総胆管内に移動させた。その後、乳頭部を拡張し結石を十二指腸内へ押し出すことに成功した。

症例 2.

27 歳女性：2 年前に他院にて総胆管囊腫のため手術が施行された。原因不明の発熱精査のため入院となったが、CT にて肝外胆管に腫瘤を認めたと



Fig. 3 Post-operative cholangiography shows a residual stone in right hepatic duct (arrow).

め経皮経肝胆道造影が施行された (Fig. 4)。結石か腫瘍かの鑑別が困難であったため PTCS を行ったが、胆道は狭窄しており視野が十分ではなく、考察したシースを使用し再度 PTCS を施行した。肝管内に 2 個の結石 (Fig. 5) が確認でき

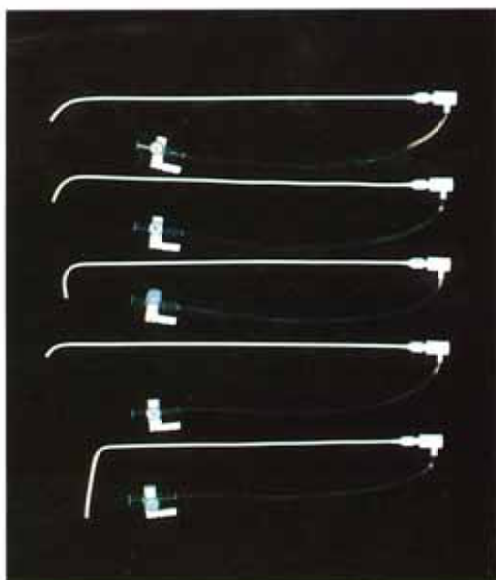


Fig. 2 Five types of bended sheath (6 Fr)

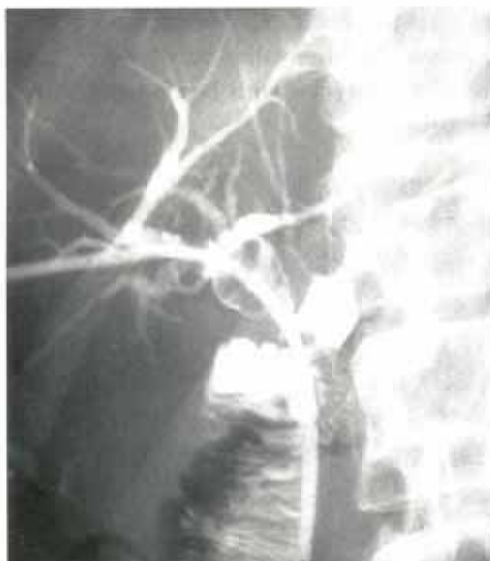


Fig. 4 A large filling defect is noted at right hepatic duct.

たため付属のバルーンにて結石を押し出し除石した。

考 察

胆道系疾患に対する超細経胆道鏡の使用はまだ始められたばかりであり、その評価は確立していない。我々の使用した超細経胆道鏡は通常のドレナージの瘻孔より拡張することなく検査可能であり、末梢の胆道内や狭窄部へも容易に挿入出来る点で優れており、患者に対する負担も極めて少ない。しかし、先端アングル機構の不足により、屈曲部の観察は困難であった。我々の考案した屈曲

シースは、胆道鏡の先端アングル機構の不足を補うものであり、狭い部位での観察が可能であった。さらにシースより生食を注入する方法を用いたため、常に視野が確保され、従来鉗子孔より行っていた方法に比べ優れていた。

ま と め

超細経胆道鏡は瘻孔を拡張することなく施行でき、末梢部の観察も可能である。また、屈曲シースの併用は、狭い屈曲した胆道の観察が行える点で有用であると考えられた。今後は電気水圧衝撃波やバイオプシー鉗子などを併用し、胆道系の診断および治療に応用していきたい。

文 献

- 1) 二村雄二, 早川直和, 豊田澄男: 経皮経肝胆道内視鏡. 胃と腸, 16: 681-689, 1981
- 2) 中沢三郎, 内藤靖夫, 木本英三 他: 胆管癌診断における経皮経肝胆道鏡の有用性. 胆と膵 6: 1339-1347, 1985
- 3) 後町浩二, 生沢啓芳, 安尾 信: 電気水圧衝撃波を用いた胆道鏡下碎石術の経験. Prog Dig Endosc 26: 183-187, 1985
- 4) 山田英夫, 神津照雄, 悦野幸伸: 胆道結石症に対するレーザー治療の現場と問題点. 胆と膵 11: 811-816, 1990



Fig. 5 Cholangioscopic finding shows two stones in the hepatic duct.